

ペリー提督100年の夢：
トラベルライティングとしての『アメリカ艦隊遠征記』

山里 勝己

Commodore Perry's Dream of One Hundred Years:
Reading *Narrative of the Expedition of an American Squadron to the
China Seas and Japan* as Travel Writing

Katsunori YAMAZATO

名桜大学

環太平洋地域文化研究 No. 2 抜刷

2021年3月

原著論文

ペリー提督100年の夢：
トラベルライティングとしての『アメリカ艦隊遠征記』

山里 勝己*

Commodore Perry's Dream of One Hundred Years:
Reading *Narrative of the Expedition of an American Squadron to the
China Seas and Japan* as Travel Writing

Katsunori YAMAZATO*

要 旨

本稿では、『アメリカ艦隊遠征記』(1856) (以下、『遠征記』と略記) における琉球への初来航 (1853) に関する「記録」(ナラティブ) をトラベルライティングの視点から読むことで、琉球とアメリカの接触のありように焦点をあて、そこに表象された他者像を分析する。その際に、公式記録 (= 『遠征記』) のみならず、艦隊の首席通訳・翻訳官であったサミュエル・W・ウィリアムズ (Samuel Wells Williams) のような随行者の日録などに表象された琉球(人) 像をも検討し、同時に琉球側の通事であった牧志 (または板良敷) 朝忠がアメリカ艦隊と接触した際の言説を前景化し分析する。1853年、「大琉球島」に出現した「コンタクト・ゾーン」で生成される (あるいは揺らぐ) 主体の様相を見ることで、アメリカと琉球の相互認識やアイデンティティ意識の歴史的淵源を確認してみたい。

キーワード: トラベルライティング, コンタクト・ゾーン, マシュー・カルブレイス・ペリー, 牧志 (板良敷) 朝忠, サミュエル・W・ウィリアムズ

Abstract

In this paper I read *Narrative of the Expedition of an American Squadron to the China Seas and Japan* (1856) as travel writing that records the squadron's contact with the Ryukyu Kingdom in 1853. By so doing, I focus on the mutual representations of the Other not only in the official narrative of the American expedition but also in the private journals and records written by those who accompanied Commodore Perry's expedition, such as Samuel Wells Williams, who served as the "first interpreter of the expedition." Additionally, I focus on Makishi (or Itarashiki) Chochu, the interpreter of the Ryukyu Kingdom who negotiated directly with Perry's officers, and analyze how he is represented in the narrative and the journals. A "contact zone" emerged in "the Great Lew Chew Island" in 1853 with the arrival of the American squadron, and by analyzing "how subjects get constituted in and by their relations to each other," to quote Mary Louise Pratt, we may be able to identify the historical origin of the mutual representations and the sense of identity that have lasted until today.

Keywords: travel writing, contact zone, Matthew Calbraith Perry, Makishi (or Itarashiki) Chochu, Samuel Wells Williams

* 名桜大学大学院国際文化研究科国際地域文化専攻 (博士後期課程) 〒905-8585 沖縄県名護市字為又1220-1 Doctoral Program, International Culture and Area Studies, Meio University, 1220-1 Biimata, Nago, Okinawa 905-8585 Japan

I. トラベルライティングとは何か

本論の目的は、マシュー・カルブレイス・ペリー (Matthew Calbraith Perry) を指揮官とする、アメリカ艦隊『遠征記』(*Expedition*) 中の琉球をめぐるナラティブを、トラベルライティングの視点から分析することにある。このような視点から『遠征記』の琉球に関する記述を分析した研究は管見の限りでは本論が初めてである。ペリーは日本との開国交渉を進める中で、5度にわたって琉球に来航しているが、本論では、1853年5月26日の初来航を中心に、遠征に伴って書かれた「随行記」なども含めて分析してみたい。^(注1)

「トラベルライティング」とは、最も単純化した言い方をすれば、旅行に関する記述を意味する。あるいは、それは新しい世界や遠く離れた土地に住む異なる人種や民族に関する興味深い報告を指す言葉でもある。そして、それはたいていノンフィクションのジャンルに属するものとして分類され、小説や詩と比較すると、文学としてはサブジャンルに属するものであると考えられてきた。しかしながら、トラベルライティングを明確に定義することは容易ではない。トラベルライティングは、個人のジャーナル(日記)、旅行記、エッセイ、短編小説、長編小説、数々の(博物学的)報告書、ネイチャーライティングなどを含むハイブリッドなジャンルである。そして、基本的にこのジャンルの中心にあるのは一人称のトラベルブック(「旅行記」)であり、それは語り手(または作者)の遭遇した直接的な経験の報告であると見なされてきた。しかし、これは原理的な定義に過ぎず、より深く分析を進めると、このジャンルは様々な問題を孕んでいることが理解される。カール・トンプソン(Carl Thompson)はこのジャンルを定義することの難しさや曖昧さに言及しつつ、このように述べている。

For all travel writers find themselves having to negotiate two subtly different, and potentially conflicting, roles: that of reporter, as they seek to relay accurately the information acquired through travel, and that of story-teller, as they seek to maintain the reader's interest in that information, and to present it in an enjoyable, or at least easily digestible way. And the necessary negotiation of these two roles ensures that the distinction between 'fiction' and 'non-fiction' in travel writing is not as clear-cut as one might initially assume. (27)

ペリー提督が指揮したアメリカ艦隊の『遠征記』を読む際の焦点のひとつは、やはり“reporter”と“story-

teller”の問題である。誰が『遠征記』の“reporter”であるか、誰が“story-teller”なのか、reportの内容はどのようなものなのか、storyどのように編まれているか、いま一度確認しておく必要があるように思われる。あるいは、『遠征記』が、そのタイトルでも明示されているように、“narrative”(記録)であるということに注目すれば、“narrator”(語り手)に関する分析も必要であろう。

また、メアリー・ルイズ・プラット(Mary Louise Pratt)は、トラベルライティングにはより複雑な様相があることを指摘し、このジャンルの研究に“contact zone”の概念を導入しつつ、次のように述べている。

It [“contact zone”] invokes the space and time where subjects previously separated by geography and history are co-present, the point at which their trajectories now intersect.

The term “contact” foregrounds the interactive, improvisational dimensions of imperial encounters so easily ignored or suppressed by accounts of conquest and domination told from the invader's perspective. A contact perspective emphasizes how subjects get constituted in and by their relations to each other. It treats the relations among colonizers and colonized, or travelers and “travelees,” not in terms of separateness, but in terms of co-presence, interaction, interlocking understandings and practices, and often within radically asymmetrical relations of power. (8)

「コンタクトゾーン」の視点から分析すると、『遠征記』の中では、琉球人たちは「来航者」(travelers=invaders)の眼差しにさらされる「来航される者=被来航者」(travelees)であり、非対称の力が接触する中で表象され、英語世界を中心にその姿を伝えられ、語られた人物たちである。大航海時代から始まる人間の移動の歴史の中で、欧米の旅行者たちの書いたトラベルライティングは、彼らの視点から「来航される者」の姿を伝えることで欧米中心の世界像を生成することに寄与してきた。実際、アメリカ艦隊の航海は、マルコ・ポーロ(Marco Polo)からクリストファー・コロンブス(Christopher Columbus)へといたる、「ジパング」を探求するナラティブの延長線上にあると意識されていて、米国とペリー提督が「ジパング」をヨーロッパ文明の影響下に組み入れることに成功したのだと考えられているのである(*Expedition* 4-5)。しかし、プラットは「コンタクトゾーン」の概念を導入しつつ、非対称の関係性に双方

向的な眼差しを認めることで、主体や世界像の生成に相互的な力学が働いていることを指摘した。本稿では「来航者」と「来航される者」たちのコンタクトの様相を中心に分析するが、その際には、当然のことであるが、物言えぬ（＝語る機会を奪われている）“travelees”のパースペクティブを前景化しながら、彼らの主体性にも焦点を合わせて分析を進める。

プラットの指摘を待つまでもなく、琉球（人）とのコンタクトは、アメリカ側においてもアイデンティティの再構築または再確認を行う機会となり、同時に思いもかけなかったような自らのアイデンティティの揺らぎをもたらす経験となった。この様相について、『遠征記』だけでなく、ペリーの随行者たちの言説にも言及しながら分析する。独立戦争前から20世紀後半までのアメリカのトラベルライティングに関する13編のエッセイを収録した*The Cambridge Companion to American Travel Writing* (2009) の編者たちは、アメリカン・トラベルライティングは、個人のアイデンティティ形成と国家的アイデンティティ構築に深く関連するジャンルであると指摘している(1)。このような様相については、『遠征記』だけでなく、ペリーの随行者たちの文章にも言及しながら分析してみたい。

ペリーの遠征、琉球、トラベルライティング

コロンブスが1492年に「新世界」の先住民と遭遇すると、それに続いてアメリカゴ・ヴェスプッチ (Amerigo Vespucci) や他の航海者たちが遭遇をかさねて「新大陸」の先住民とヨーロッパ人が相互に他者を「発見」していく。1620年には難民のようなピューリタンたちが大西洋を越えて「アメリカ」大陸東岸に到達する。それからヨーロッパ人たちが陸続と移動してきて、現在の北米大陸を東から西へと移動する西漸運動が始まる。ジョン・ガスト (John Gast) が描いた「アメリカン・プロGRESS」 (*American Progress*, 1872) は、いわゆる「マニフェスト・デスティニー」の絵画的表象であるが、このよく知られた絵画をあらためて分析すると、文明＝光の世界、未開・非文明＝闇の世界という、キリスト教的な二分法がこの作品にも露呈していることが理解される。しかし、アメリカは西海岸でその「プロGRESS」をやめるわけではない。ハーマン・メルヴィル (Herman Melville) の *Typee* (1846) や *Moby-Dick* (『白鯨』, 1851) に描かれているように、アメリカは太平洋に進出し、19世紀の捕鯨船が躍動するようになる。ユーロ・アメリカン文化に内在する神話から放射される想像力のエネルギーが、アメリカを突き動かし、北米大陸を横断し、未知の海洋世界に浸透し始めたということが、『白鯨』のピークオド号の航跡を地図で再現するとよくわかるはずである。

大陸における「フロンティア消滅」に伴うアメリ

カの海洋進出について、クリストファー・マクブライド (Christopher McBride) は次のように指摘する。“As the land frontier closed, the sea voyage became important for both imperial and literary exploration. The travel writing that results enables us to understand the relationship between American colonial and military activity abroad.” (165) ハワイや太平洋島嶼地域がどうなったかということについては説明の必要はないだろう。そこからさらに太平洋を西に進むと、その果てるところに「新たなフロンティア」のような琉球の島々が横たわっていた。これが21世紀に至る大まかな流れであるが、19世紀ペリー艦隊の琉球諸島に対するインペリアルな欲望と21世紀沖縄の現状との繋がりについては後で詳述する。

II. トラベルライティングとしての『遠征記』

1856年に刊行された『遠征記』の正式のタイトルは以下のとおりである。長い表題であるが、タイトルページをそのまま書き写すことにする。*Narrative of the Expedition of an American Squadron to the China Seas and Japan, Performed in the Years 1852, 1853, 1854, under the Command of Commodore M.C. Perry, United States Navy, by Order of the Government of the United States*. これは正式には3巻本である。アメリカの歴史学者ジョージ・H・カー (George H. Kerr) によれば、全部で1万セットが印刷され、そのうちペリーが受け取ったのは1,000セットで、彼はそのうち500セットを『遠征記』を編纂したフランシス・L・ホークス (Francis L. Hawks) に贈与している。刊行に要した費用は当時の金額で36万ドルであったという (298)。

これまで『ペリー提督日本遠征記』のタイトルで日本語に翻訳され、読まれてきたのは第1巻である。日本開国を目指したのであるから、当然のことながら、『遠征記』には日本の歴史、文化、そして社会に関する詳細な記述があり、当時の関連する文献が網羅され参照されている。『遠征記』は艦隊が1852年11月にヴァージニアのノーフォークを出港し、喜望峰を回って江戸に至るまでの記録となっているが、琉球の那覇に到着するまでに寄港したマデイラ島、ケープタウン、モーリシャス、セイロン、シンガポール、マカオ、香港、上海に関することが冒頭の6章で詳述されている。先述したように、原書のタイトルには“China Seas” (南シナ海と東シナ海) が入っているが、これまで刊行された日本語訳はこの部分をタイトルから省略している。

誰が語っているのか——交錯する眼差し

トラベルライティングと書くと、読者はまずは「一

人称で書かれた作者の実体験を記録した旅行記」(“the travel book,’ the first-person narrative of travel which claims to be a true record of the author’s own experiences” : Thompson 27) を想起するだろう。アメリカ文学で言えば、例えばジョン・ミュア (John Muir) の *The Mountains of California* (1894) は、西部のウィルダネス、特にシエラネヴァ山脈に関するトラベルライティング (旅行記あるいは報告書) であり、同時に古典的ネイチャーライティングの作品であると評価される一人称のナラティブでもある。しかし、『遠征記』は、このような定義の枠組みを拡大する複雑なプロセスを経て書かれている。原書のタイトルページには以下の文言がある。“Compiled from the Original Notes and Journals of Commodore Perry and His Officers, at His Request, and Under His Supervision, by Francis L. Hawks, D.D. L.L.D. with Numerous Illustrations.” (これは上に引用した長いタイトルの一部であると見なすこともできるが、議論の便宜上、分けて考えることにする。) ホークスは、(1) 自らを「単なる編纂者」であるとし、『遠征記』はペリーの日誌や書簡を中心に編纂され、(2) その他、将校や乗組員たちの記録は海軍長官の命令により全て提督に提出する義務があったので、これらも遠征の全容を国民に知らしめるために使用された、と「まえがき」で書いている。当然のことであるが、このような膨大な資料を単独で「編纂」することは不可能な仕事であり、ホークスには協力者が必要であった。ホークスは「まえがき」で、できるだけ早く刊行するために、ペリーの許可を得て「一人の有能な紳士」(“a competent gentleman” : Robert Thomas, Esq., M.D., “Note,” iv) に資料の整理や下書きの準備を依頼したことを明記している。

「編纂者」の仕事は以下のようなものであった。

The work to be performed was that of a compiler merely. With no responsibility as to the facts related, the writer [Hawks] believed his appropriate duty to be simply to weave into a connected narrative all of interest or importance that could be gathered from these various materials, and to present, in chronological order, the incidents of the Expedition. (iv)

ペリーの日誌からは、多くの場合、「文字どおり」に引用したとホークスは書いているが、やはり全体を均して一貫した「ナラティブ」に仕上げることはたいへんな仕事であっただろう。出来上がった草稿は細部にわたるペリーの「監修」を経て刊行にこぎつけたのであった (iv)。このような経緯を経て編纂された『遠征記』の

三人称の語り手として前景に登場するのはホークスとペリーである。しかし、それだけではなく、ホークスの文体の均し (= 編纂または執筆) の中から、ノートや日誌や報告書を命令に従って提出した将校や艦隊に随行した民間人たちの声が重層的に響いてくる。だから、『遠征記』は、multi-voiced narrative と呼ぶべきものであろう。ついでに言えば、ペリーが最初に編纂を依頼したのは、19世紀アメリカを代表する小説家ナサニエル・ホーソーン (Nathaniel Hawthorne) であった。ペリーは、日本との開国交渉を続ける中で体調を崩し、陸路と海路で艦隊より先に帰国するが、その際にリバプールのアメリカ領事であったホーソーンに遠征記の編纂を打診したのである。ホーソーンは公務で多忙だと言って断っているが、ペリーと会った後の1854年12月28日に “. . . the world can scarcely have in reserve a less hackneyed theme than Japan” とその日誌に書いている (qtd. in Miner: 18)。

ホークスは、ペリーの指示により、資料を提出した主要人物たちの名前を「まえがき」の下欄の注に記している (iv)。その中にベイヤード・テイラー (Bayard Taylor) がいる。テイラーは旅行作家、詩人、画家として活躍したが、アルフレッド・ベンディクセン (Alfred Bendixen) によれば、1850年代半ばまでには、“America’s best known professional travel writer” (118) と評価されるようになっていた。彼は、日本に行きたくて、ニューヨークのペリーの友人の紹介状を持って上海で艦隊の到着を待っていた。最初は民間人を嫌がってペリーはテイラーの随行を拒否した。艦隊生活の不便さや、作家としてテイラー自身が書くものは海軍省の命令により全てペリーに提出する義務があることなどを説いて説得したが、それでもテイラーは随行許可を懇願した。結局は、テイラーの人柄や謙虚な態度に好感を抱き、ペリーは随行を許可する (152)。

テイラーの随行は『遠征記』に大きな貢献をすることになった。というのは、アメリカ当代随一の旅行作家は、約束どおり、「自らの名誉を傷つけることなく」(152)、「大琉球島」(“Great Lew Chew Island”, 現在の沖縄島) に関する旅行記をペリーに提出したのである。そして、「大琉球島」の最初の印象を記録した文章 (第7章冒頭) を始めとして、挿入された職業作家の緻密な自然と人の表象は、『遠征記』の読者に深い印象を与えるとともに、それからほぼ100年後、20世紀半ばに沖縄島に上陸した米軍にも読まれるものになった。例えば、『遠征記』第8章は、1853年5月30日から6月4日までの、6日間にわたる「大琉球島」の徒歩による調査報告になっていて、26頁に及ぶ「大琉球島探検報告」のほぼ全てがテイラーの文章になっている (184)。

以下、「大琉球島」の中部を描いたテイラーの文章を

引用する。

It was a picture of pastoral loveliness, such as is rarely found in any country. Nothing struck me more during the journey than the great variety of scenery which the island encloses in its narrow compass. We passed through, at least, four different districts, which bore but the slightest resemblance to each other, either in features or character. We had both the groves of the tropics and the wild woods of the north; the valleys of Germany and the warm shores of the Mediterranean. (179)

ベンディクセンは、旅行作家としてのテイラーについて、“His writing captures some of the thrill of visiting foreign lands but offer little more than superficial descriptions”と評している(118)。「大琉球島」の6日間にわたる「探検」とその描写は、文学史的には「アメリカン・ルネサンス」の影響を受けた亜熱帯の島の自然の表象になっていると言えるだろう。また、その文章は、若い頃から世界を広く旅したテイラーらしく、「大琉球島」の東海岸（現在の金武）や西海岸の（現在の）恩納あたりまでを世界各地と比較しつつ緻密に描写していて、19世紀琉球に関する貴重な記録になっている。上に引用した文章は、率直に言えば、指摘されているように表層の描写に傾斜し、ステレオタイプのロマンティックな自然描写である。しかし、テイラーは恩納山中の農家と自然を描いた自らのスケッチを、その著書 *A Visit to India, China, and Japan, in the Year 1953* の口絵に使っていて、それはこの本に印刷された唯一のスケッチであるという（オーシェリー・上原 83）。これも19世紀沖縄島に関する貴重な記録のひとつである。

コンタクトゾーンにおけるアイデンティティ

1853年のペリー来航を、「アメリカによる琉球の第一次占領」として指摘したのは、先述したカーであった(3)。この「第一次占領」の際に琉球王国の通事として活躍したのが牧志（または板良敷）朝忠である。琉球王国の意志は主として通事である牧志を通してペリーに伝えられたが、1853年5月30日に牧志に何が起こったか見てみよう。

当時の琉球における通事間の共通語（リングアフランカ）は中国語であった。艦隊の首席通訳・翻訳官はサミュエル・ウェルズ・ウィリアムズで、長期にわたって中国に滞在し、中国研究をしていたアメリカ人であった。彼は宣教師でもあり、のちにイエール大学の初代中国語・中国文学教授に就任した。ウィリアムズだけでなく、中

国人の通訳も艦隊に随行していた。高良倉吉によれば、牧志朝忠は王府が派遣した使節団の随員として中国に渡り、「長期滞在中学問を修めるとともに北京官話をも修得し」、中国語が堪能であったという(78)。だから、牧志とアメリカ艦隊の通訳は中国語で交渉した。ところが、陸上に物資貯蔵庫（“House”）を求めるアメリカ側との交渉の席で、要求があまりに理不尽で高圧的なものになってくると、（これはよく知られたエピソードであるが）牧志が突然立ち上がり、坐っていたペリーの将校たちに歩み寄って彼らに英語で話しかけたのである。それまでは（琉球王国の常套手段であったが）できるだけ下手に出て、平穩に交渉を処理しようと牧志は努力していたのであるが、中国語を話す通事としての役割を投げ捨てると、牧志はペリー側の通訳を介することなくいきなり英語でこのように発言してペリーの将校たちを驚かせた。

Gentlemen, Doo Choo [Ryukyu] man very small, American man not very small. I have read of America in books of Washington—very good man, very good. Doo Choo good friend American. Doo Choo man give America all provision he wants. American no can have house on shore. (*Expedition* 159)（「紳士諸君、琉球人はとても小さい。アメリカ人はとても小さくはありません。アメリカについては、ワシントンに関する本で読みました。とても立派な方、良い方です。琉球はアメリカ人の良き友人です。琉球人は食糧などアメリカが欲しいものはすべてあげましょう。しかし、アメリカは陸上に家を持つことはできません」）。（拙訳）

ホークスは、これは通事が使った言葉を「ほぼそのまま」引用した（“These were nearly his exact words. . .”）と書いている(159)。このときの通事が誰であったか、『遠征記』には明記されていないが、ウィリアムズはこの時の通事が Adjirashi = 板良敷（牧志）であったことを日録に記している(13)。また、琉球語ではL音とD音が互換的に使われるが、“Doo Choo”という綴りが示唆するように、アメリカ側は牧志の発音を聞き取ったとおりに記録しているようだ。^(註2)

ペリーや将校たちは既にベイジル・ホール（Basil Hall）の『朝鮮・琉球航海記』（1818）を読んでいた。ホールは流麗な文章を書く作家でもあったが、歴とした軍人でもあり、1816年の来航時に陸上に「家」（物資貯蔵場所）を確保していた。イギリス海軍が陸上に「家」を確保することができたのであれば、なぜ我々もそうすることができないのかとペリーの将校たちは琉球側に迫った。これに対して、琉球側は巧みに対応しつつ要求をかわして

いたが、艦隊側の高圧的な態度に苛立った牧志が英語で直接に琉球の意志を表明したのである。牧志は最先端の世界情勢を理解し、来航する異邦人と接触していた知識人であり、一国の命運を意識して行動する気概に溢れた人物であった。

ここで興味深いのは、自分はアメリカを知っているという牧志の発言である。初代大統領ジョージ・ワシントン (George Washington) に関する本でアメリカのことを学んだ、ワシントンは立派な方であると言いながらペリーの将校たちに迫っていく。神格化されたワシントンの名前が琉球の「ネイティヴ」の口から出ることを彼らはまったく予想していなかったであろうし、その名前はペリーの将校たちに畏怖の念を抱かせるものでもあった。牧志はこのように相手の意表を突いておいて、“Doo Choo good friend American” とか、航海で必要とされる食糧などはすべて提供すると懐柔を試みつつ、最後は “American no can have house on shore” と明確に相手の要求を拒否する。要するに、アメリカは陸上に橋頭堡を築こうと目論んでいて、そこに両者のせめぎ合いがある。しかし、そういうことは琉球側としては絶対に避けたい。そのような駆け引きを反映して牧志の発言は簡にして要を得た戦略的な言説になっている。ここには国の存亡を賭けて英語を話す通事の声と姿が刻印されているのである。

高良によれば、当時の琉球には英語を話す人物が数人いたが、その中で「最も英語を得意とした」のが牧志であったという (78)。琉球人とアメリカ人を比較する牧志の英語は拙いように見えるが、あえて “small” という言葉にこだわるどころにその戦略的な意図、すなわち、言葉の上だけでも均衡を保ちながら交渉しようとする意図が感じられる。航海に必要な食糧などを意味する “provision” のような頻度の低い言葉を知っている通事が、“small” と対比される “tall” や “big” などの基本語を知らないわけがない。また、大城立裕は、牧志の英語について、「完了形、複数形、『について』という意味の “of”，あるいは [“provision” の後に置かれる] 目的格関係代名詞の省略など、見事なものである」と指摘している (5)。(注3)

ペリーは鎖国日本をこじ開けようという強い意志を持って来航したから、彼はホールのように (英国の臣民としての) 品格を気にするような慎みはいっさい示さない。ペリーは、高圧的で傲慢、周知のように強引な砲艦外交を推進した。このようなペリーの琉球への対応を見つめる首席通訳・翻訳官ウィリアムズはペリーから距離を置くようになる。アメリカ側の傲岸な振る舞いに対して、牧志はくり返し抗議するしかないが、ペリーの将校たちの強引さと牧志の粘り強い交渉を観察していたウィリアムズは、1853年5月30日の日誌に次のように書く。

It was a struggle between weakness and right and power and wrong, for a more highhanded piece of aggression has not been committed by anyone. I was ashamed at having been a party to such a procedure, and pitied these poor, defenseless islanders who could only say no. No one was incommoded by the act, indeed; but perhaps the towns-people of Tumai [Tomari] felt it all the more keenly, and I pitied them heartily. (13)

ウィリアムズの随行記 (*A Journal of the Perry Expedition to Japan*) は1910年に出版されたもので、『遠征記』とは異なるもう一つの琉球に対する眼差しがあることを読者に伝える。カーは、ペリーを評して、“humorless, immensely vain, and a hard disciplinarian” であると書いている (3)。また、カーは、ペリー艦隊ではウィリアムズを含めて数人が命令に背いて記録や日誌を提督に提出していないと指摘している (298)。(注4) 研究者であり聖職者でもあったウィリアムズは醒めた観察者であったが、琉球を観察する際にはその彼さえも文明と未開という二項対立の世界観から自由ではない。しかし、ここでなによりも重要なことは、ウィリアムズの「文明人」としての「自己幻想」あるいは「アメリカン・アイデンティティ」が、琉球の現実と琉球人に対するアメリカ側の態度を観察しているうちに自らの内部で揺らぎ始め、新たなアメリカ人像が生成される契機になっていることである。「弱さと正義、力と不正義との闘い」は、換言すれば、「軍事と倫理」の問題に収斂し、現代に通底する問題を鋭く捉えた言葉である。(注5)

ペリーの指示により、ウィリアムズは5月30日の夜は交渉があった泊の公館に強引に泊り込むことになるが、この日の日誌の最後に自らを “the unwilling agent . . . of violence and wrong” であると書いている (14)。また琉球側の対応について、ウィリアムズは6月1日に次のように書いている。

It is surprising what a degree of quiet resistance an organized government like this can offer to violence without any overt act of violence, without giving any excuse for wrong by doing the like themselves. They feel their weakness and have no intention probably of resisting by force. . . (14)

アメリカ側の「暴力」に対する、琉球側の一連の (ウィリアムズに言わせれば、その「弱さ」に起因する) 穏や

かな「非暴力」の抵抗に対する率直な驚きがここには書かれている。この出来事は、まさに1853年の琉球に出現した「コンタクト・ゾーン」における非対称の力の葛藤を記録したものであるが、ここで顕現した（理念ではない）現実のアメリカの姿がウィリアムズの良心に突き刺さってくる。

このような問題は、やがて勃発するアメリカの奴隷制をめぐる国内戦争や、アメリカの帝国主義的拡張の中で多くのアメリカ人が心の奥深く感じ、多くの文学作品に表象された複雑な「自己幻想」の揺らぎでもあった。そして、これは21世紀が20年過ぎようとしている現在においてもなおアメリカの「自己幻想」あるいは「アメリカン・アイデンティティ」を激しく揺さぶる状況（人種問題に端を発して激動する昨今の「アメリカの危機」と通底しているものであり、問われ続ける「アメリカ」という理念に内在する人種差別や植民地主義に繋がる文化的、政治的なありようを問う出来事なのである。また、「くり返し抗議するしかない」状況は、1853年から今日に至るまで、琉球人/沖縄人の主要な抵抗の手段となっていて、やがてそのような抵抗は「弱さと正義」を越えた新たな理念として萌芽していくものでもあるが、いうまでもなく、これはほぼ160年間のアメリカと琉球・沖縄に関する基本的な構図を指し示すものでもある。

牧志朝忠のアメリカ観

興味深いことに、ウィリアムズは牧志朝忠にアメリカへの関心があることに気づく（Williams 73）。ペリーは江戸幕府との交渉がうまくいかないと、いったん那覇に戻ってくる。琉球は19世紀中葉からすでにアメリカの前進基地になっていて、これは21世紀冒頭の状況と基本的に変わらない。牧志はアメリカ合衆国史を読み、アメリカについてある程度の知識を有していた。交渉の席でいきなり立ち上がり、ペリーの部下たちにワシントンは立派な人物であると述べた牧志の英語の発言の背景には、どのような知識の蓄積があったのであろうか。

ペリーが首里城入城を果たした後で、『遠征記』の語り手は牧志について次のように述べている。

The interpreter of the regent was a young native, named *Ichirazichi*, who had been educated at Peking, where he remained three years. He could speak a little English, but the Chinese was the language of communication. This youth had some knowledge of the United States history and geography. He was not unacquainted with the character and conduct of George Washington, and called him “a very great mandarin.” Where is it that the honored name of the Father of

our country, this man for all time, this man, whose peerless purity is the proud heritage of a common humanity the world over, has not reached? It is heard in the Arab tent, and in the Chinese village, under the shades of Lew Chew, and the cities of Japan, in southern Asia, and on the shores of the Arctic; all western Christendom knows it, all honors it. (192)

牧志については、(1)北京で3年間学んでいること、(2)英語がすこし話せること、(3)合衆国の歴史と地理に関する知識を有していること、(4)ワシントンを知っていて、「非常に偉大な人物」であると発言したことなどが書かれている。ここで注目したいのは、「板良敷という若いネイティブの通事」の言葉に触発されて書かれた陶酔感を伴う「国父」ワシントン礼賛である。この引用の後半は、19世紀アメリカのナショナル・アイデンティティの再確認のみならず、高揚し膨張するアメリカン・ナショナリズムを露呈するものになっている。

ペリーやホークスは、ラルフ・ウォルド・エマソン（Ralph Waldo Emerson）、ヘンリー・D・ソロー（Henry David Thoreau）、ウォルト・ホイットマン（Walt Whitman）などの19世紀アメリカを代表する哲学者や詩人の同時代人であった。文脈は異なっているが、「アメリカの学者」（“The American Scholar”）、「歩く」（“Walking”）、『草の葉』（*Leaves of Grass*）などに表出されたアメリカン・アイデンティティ生成に向かう「アメリカン・ルネッサンス」の強い衝動を、ペリーやホークスも共有していたのである。また、先述したように、19世紀のアメリカン・トラベルライティングが、個人のアイデンティティ形成や国家的アイデンティティ構築に深く関連するジャンルであることが、このような一節を読むと明確に理解されるはずである。

1853年5月31日、ウィリアムズはそのジャーナルに次のように書いている。

He [Makishi] said he had heard of Washington as being a good man, but he thought Washington would not have done so. A written protest was handed in to make known to the Commodore the desires of the authorities in regard to the house, couched in respectful terms, in which, however, were two or three misstatements. (14)

牧志は、英語だけでなく、中国、ヨーロッパ、米国の政治、文化、社会についてかなり学んでいたのではないかとウィリアムズは推測する（14）。ウィリアムズの5月31日の日録の背景にあるものは、牧志の通事としての

「アメリカ研究」が前景化された瞬間でもある。牧志はワシントンに言及しながら、かの偉人ならあのようなことはしなかったのではないか、これがアメリカの理想であろうかと婉曲に問いかけているとウィリアムズは理解したのであろう。あるいは、牧志のこの発言は、アメリカの「国父」に言及しながら、そのような神話的なワシントン像とそれに付随して構築されている公式のアメリカン・ナショナル・アイデンティティを脱構築しようとする発言であると、ウィリアムズは鋭く感じて取っているであろう。ペリーは（あるいはホークスは）と言えば、ジョージ・ワシントンを神格化しつつ、自らのミッションを正当化し、そのような存在と自らをかさねることで自らのアイデンティティを構築し、再確認しようとしているのである。

琉球の若い知識人牧志朝忠にとっては、このようなコンタクトは、国際的なパースペクティブを獲得しつつ、帝国化したアメリカの浸透に拮抗できる論理と自らの新たな主体を構築する契機となっている。プラットは、コンタクト・ゾーンのダイナミクスについて言及する中で、主体の確立は相互的なものであると述べているが(4)、ウィリアムズにとどまらず、琉球(人)を“a mouse in the talons of the eagle”(174)に喩えた「ミシシッピー号」書記官J・ウィレット・スポールディング(J. Willet Spalding)のように、他者と遭遇する中で自らの主体を新たに省察し構築しようとする言説が萌芽していく。1853年のコンタクトは、琉球側に視点をおいて見ると、「文明を有する者たち」が思いもかけなかったような言説に遭遇してアイデンティティ(または「自己幻想」)が動揺し、太平洋の西の果てに浮かぶ島嶼地域から影響を受けることになった出来事でもあった。もちろん、牧志のような若い通事にとっても、アメリカ艦隊とのコンタクトは、彼自身の琉球をめぐる世界像に大きな変容をもたらすような衝撃となったであろうことは想像に難くない。

Ⅲ. ペリー提督100年の夢——「第一次琉球占領」と「第二次琉球占領」

ペリーの来航は日本開国が主要な目的であったが、琉球を占領するということが遠征の初期から企図されていたことはあまり知られていない。ペリーは、1852年11月2日、ミシシッピー号でヴァージニアのノーフォークを出航、大西洋を渡り、喜望峰やマラッカ海峡を航海して日本へと向かった。その航海で最初に立ち寄ったのが、ポルトガル領のマデイラ島であった。12月14日、ペリーはマデイラから米国海軍長官ジョン・P・ケネディ(John P. Kennedy)に書簡を送り、その中で琉球占領を提言した。

Now, it strikes me that the occupation of the principal ports of those islands [“the islands called the Lew Chew group”] for the accommodation of our ships of war, and for the safe resort of merchant vessels of whatever nation, would be a measure not only justified by the strictest rules of moral law, but what is also to be considered, by the laws of stern necessity; and the argument may be further strengthened by the certain consequences of the amelioration of the condition of the natives, although the vices attendant upon civilization may be entailed upon them. (85)

この書簡は海軍長官からエドワード・エヴァレット国務長官(Edward Everett)へと転送され、さらにミラード・フィルモア(Millard Fillmore)大統領の裁可を得て1853年2月15日付の書簡でエヴァレットからペリーへ返答が送られている。エヴァレット書簡は大統領の許可を伝えるものであったが、占領についてはあくまで「ネイティブたちの合意」の上でことを進め、「自衛の手段以外には武力を用いないこと」などを条件とするものであった(*Expedition* 87)。ペリーは、占領計画をアメリカやその他の諸国の利益に叶うものであると正当化しているが、ここに露呈しているものは19世紀半ばのコロニアルな言説であり、太平洋で擡頭する米国のインペリアルな力の誇示である。ペリーは、自らは「文明」を運ぶ者であり、「ネイティブ=来航される他者」はたとえ「文明」の害悪に晒されるようになるうとも、「文明」の救済を待望していると信じてやまない。そしてこのような世界観が、「マニフェスト・デスティニー」のイデオロギーが表象された「アメリカン・プロGRESS」の光と闇のメタファーの延長線上にあることは明らかであろう。^(注6)

ペリーが琉球の占領を米国政府に提案したのはこれだけではない。じつは、『遠征記』には書かれていないが、ペリーは1853年12月24日と1854年1月25日にもワシントンに向けて琉球占領を提案しているのである。この時は、1852年の大統領選挙の後で合衆国の大統領と海軍長官が代わっていて、新政府はペリーの提案を“embarrassing”であるとして却下している(Kerr 328)。ペリー/ホークスは、『遠征記』でこのやり取りに言及することはなく、提督には琉球を占領する意図はなく、米国はすでに琉球の法律や慣習に干渉することなく必要な影響力を確保したから占領の必要はなかったと曖昧な書き方をしている(323-24)。

1853年の来航から、自由に「大琉球島」の「探検」、測量、調査を行い(162-86)、野戦砲二台を先頭に首里城まで

行進し、軍事力によるブラフをかけながら外国の軍隊として首里城入城を果たし（188-94）、1854年に「琉米修好条約」（“*Compact between the United States and the kingdom of Lew Chew, signed at Napha, Great Lew Chew, the 11th day of July, 1854*”）を締結するまで（495-96）を、カーは「アメリカによる沖縄の第一次占領」と呼び、1945年には「第二次占領」が始まったと指摘している（3）。『遠征記』に記されている「協約」（または条約）は“Empire of Japan”と米国による「日米和親条約」と異なり、八つのパラグラフからなる緩やかなものであり、「占領」の持つ強制的かつ暴力的なトーンは抑制されている。1852年のペリーの「琉球の主要な港湾占領」の夢が実現するのは1945年のことであったが、このような「ペリー100年の夢」が、21世紀沖縄の姿を生成してきた歴史的ダイナミズムの淵源にあることは言を俟たない。

『遠征記』はトラベルライティングと軍事報告という、二つの相貌を有している。いや、19世紀欧米の「トラベルライティング」の多くが、例えばヘンリー・M・スタンリー（Henry Morton Stanley）の*Through the Dark Continent*（『暗黒大陸を抜けて』1878）に見るように、じつはその根底で意識的に、または無意識のうちに、他者像を生成することで「征服」のために利用された報告でありナラティブであった（Thompson 130-53）。それは、基本的にコロニアルなトーンを帯びたものであったと言うこともできるだろう。テイラーの文章がほぼ全体を占める第8章や、（本論では触れなかったが）ペリーに随行し、その作品や写真が『遠征記』に挿入されている画家のハイネや写真家のブラウンが表象したものについても、より踏み込んだ分析と評価が待たれるところである。

軍事報告としての『遠征記』は19世紀半ばから始まるアメリカの太平洋戦略に影響を与えた。例えば、1945年の地上戦で沖縄島に上陸した米軍の将校たちは、*The Okinawas [sic] of the Loo Choo Islands, A Japanese Minority Group*（1944）や*Civil Affairs Handbook, Ryukyu (Loochoo [sic]) Islands*（1944）で琉球/沖縄に関する知識を学び、ハンドブックを携行して沖縄人の懐柔を図った。米軍が研究者を動員して編集したこのような文書には『遠征記』からの引用があり、これがアメリカの琉球/沖縄像の生成に寄与したことは間違いないことであろう。「第二次琉球占領」はいまなお継続され、沖縄は「ペリー100年の夢」のリアリティと向き合い続ける。

Notes

- 1 アメリカ艦隊の報告は通例『ペリー提督日本遠征記』として翻訳刊行されているが、原書のタイトルは*Narrative of the Expedition of an American Squadron to the China Seas and Japan* となっていて、“China Seas”が訳出されていない。本稿では『アメリカ艦隊遠征記』または『遠征記』とし、英文テキスト引用の際には*Expedition*と略記した。
- 2 牧志朝忠の別名は板良敷朝忠であるが、ウィリアムズは「板良敷」を“Adjirashi”とし、『遠征記』は“Ichirazichi”と綴っている（192）。また、琉球語の発音に関して補足すると、1816年に琉球に来航したホルの『朝鮮・琉球航海記』には、H. J. クリフォード（H.J. Clifford）による“Vocabulary of English and Loo-Choo Words”が“Appendix”としてついていて、クリフォードは“Loo-Choo song”に対応するものとして“Loóchoo, or Doóchoo oóta”を採録している（n.pag.）。

なお、牧志の琉球王国における身分については、名桜大学大学院国際文化研究科国際地域文化専攻（博士後期課程）の赤嶺守教授から貴重なご教示を賜った。また、同専攻の波照間永吉教授からは、琉球語の発音についてご教示を賜った。ここに記して感謝を申し上げる次第である。

- 3 『遠征記』のテキストを読む限り、牧志の英語に関する大城の指摘は首肯できる。しかし、上述したように、ホークスは牧志の発言について、「ほぼそのまま引用した」と書いている。それゆえ、それでは編纂の過程でどのような「編集」があつて「ほぼそのまま」になったのか、牧志は実際にはどのような英語で発言したのか、という思いも払拭することができない。牧志の英語には非文法的な点もいくつかあるが、牧志の琉球王国の通事としての意志を前景化するために、拙訳では非標準的な日本語での訳出は選択していない。ちなみに、ホルの琉球来航の後、英国海軍琉球伝道会から派遣されて琉球に滞在していたバーナード・J・ベッテルハイム（Bernard Jean Bettelheim）もこの交渉に同席していたが、翌5月31日ペリーに書簡を送り、牧志の英語について、艦隊の将校たちを驚かせたように「結構できる」と評価し、次のように書いている——“... [T]he native interpreter himself speaks English tolerably well of which he gave yesterday astonishing evidence before your officers”（412）。

- 4 カーによれば、ウィリアムズのみならず、テイラー、下士官エドワード・ヨーク・マコーレー（Edward

Yorke McCauley), 「ミシシッピー号」書記官J・ウィレット・スポールディング (J. Willet Spalding) などのジャーナルや記録がペリーに提出されていないという。また、カーは、琉球側の記録と『遠征記』のナラティブを比較することでより詳細な研究が可能であると指摘している (298)。

- 5 牧志朝忠とアメリカ側のやりとりについては、拙論「弱さと正義、力と不正義——琉球・沖縄、日本、アメリカをめぐる〈幻想〉試論」(野田研一編『〈日本幻想〉表象と反表象の比較文化論』ミネルヴァ書房, 2015年, pp. 187-216) と一部重複するところがある。
- 6 ホールは、『朝鮮・琉球航海記』において、1816年に見た琉球について次のように書いている——“At Loo-Choo the people are considerably civilised; but they have few wants, and they appear to be perfectly contented. Honesty is perhaps the natural consequence of such a state of society” (213)。(琉球の人々はいちじるしく文明化している。人々は無欲で、完全に満足しているようにみえる。正直は、社会がこのように充足していることの当然の結果であるかもしれない) (『航海記』春名徹訳 277)。これは、琉球人を中国や南太平洋やマレー群島の住民と比較して書いた文章である。ここには理想化された琉球があり、背景には19世紀初期イギリスのロマンティックな“noble savage” (高貴な未開人) 像も見え隠れする。それから約40年後に琉球に来航したペリーは、琉球の現実を見た後で、“The description of Captain Hall . . . is a mere romance; the production of the inventive brain of a writer not very scrupulous of historical truth. . . .” (220-21) と書き、「現実離れた夢物語に過ぎない」とホールの琉球 (人) 像を批判している。ホールの琉球 (人) 像と比較すると、ペリーやその随行者たちの琉球 (人) 像はきわめてリアリストティックである。

Works Cited

- Bendixen, Alfred and Judith Hamera, editors. *The Cambridge Companion to American Travel Writing*. Cambridge UP, 2009.
- Bendixen, Alfred. “American travel books about Europe before the Civil War.” Bendixen and Hamera, pp. 103-26.
- Bettelheim, Bernard Jean 『沖縄県史 資料編 22 *The Journal and Official Correspondence of Bernard Jean Bettelheim 1845-54, Part II (1852-54)* 近世3』。A. P. Jenkins 編, 沖縄県教育委員会, 2012年。
- Hall, Basil. *Account of a Voyage of Discovery to the West Coast of Corea, and the Great Loo-Choo Island; with an Appendix, Containing Charts, and Various Hydrographical and Scientific Notices / by Captain Basil Hall and A Vocabulary of the Loo-Choo Language, by H. J. Clifford, ESQ.* London: John Murray, 1818.
- Kerr, George H. with an afterword by Mitsugu Sakihara. *The History of an Island People*. 1958. Revised ed. Tuttle, 2000. 邦訳は山口栄鉄『沖縄島人の歴史』勉誠出版, 2014。
- McBride, Christopher. “Americans in the larger world: beyond the Pacific coast.” Bendixen and Hamera, pp. 165-79.
- Miner, Earl. *The Japanese Tradition in British and American Literature*. Princeton UP, 1958.
- Office of the Chief of Naval Operations, Navy Department. *Civil Affairs Handbook, Ryukyu (Loochoo [sic]) Islands, OPNAV 13-31*. 1944. 沖縄県立図書館資料編集室編『沖縄県史資料編 1, 沖縄戦 1 (原文編)』沖縄県教育委員会, 1995年。邦訳は『沖縄県史 資料編 1 民事ハンドブック 沖縄戦 1 (和訳編)』沖縄県教育委員会, 1995年。
- Office of Strategic Services, Research and Analysis Branch. Okinawan Studies, No. 3. *The Okinawas [sic] of the Loo Choo Islands, A Japanese Minority Group*. Honolulu, 1944. 沖縄県立図書館資料編集室編『沖縄県史 資料編 2, 沖縄戦 2 (原文編)』沖縄県教育委員会, 1996年。邦訳は沖縄県立図書館資料編集室編『沖縄県史 資料編 2 琉球列島の沖縄人・他 沖縄戦 2 (和訳編)』沖縄県教育委員会, 1996年。
- Perry, Commodore M.C. *Narrative of the Expedition to the China Seas and Japan, 1852-1854*. Dover Publications, 2000. 本稿では Dover 版を用い、タイトルページのとおりに記述した。Original title pageは, *Narrative of the Expedition of an American Squadron to the China Seas and Japan, Performed in the Years 1852, 1853, and 1854, under the Command of Commodore M.C. Perry, United States Navy, by Order of the Government of the United States. Compiled from the Original Notes and Journals of Commodore Perry and His Officers, at His Request, and under His Supervision, by Francis L. Hawks, D.D. L.L.D. with Numerous Illustrations*. Published by Order of the Congress of the United States.

- Washington: Beverley Tucker, Senate Printer. 1856. 邦訳は宮崎壽子監訳『ペリー提督日本遠征記』（上・下）角川書店，2014年，他。『遠征記』から琉球に関する章のみを取り出した対訳書に外間政章『ペリー提督沖縄訪問記』，研究社，1962年がある。
- Pratt, Mary Louise. *Imperial Eyes: Travel Writing and Transculturation*. 2nd ed. Routledge, 2008.
- Spalding, J. Willet. *The Japan Expedition. Japan and Around the World, An Account of Three Visits to the Japanese Empire, with Sketches of Madeira, St. Helena, Cape of Good Hope, Mauritius, Ceylon, Singapore, China, and Loo-Choo. By J. Willet Spalding of the U.S. Steam-Frigate Mississippi, Flagship of the Expedition*. 1855. London: S. Low, 1856. In *Ryukyu Studies since 1854: Western Encounter Part 2*. Edited by Patrick Beillevaire. Cuzon Press, 2002. Beillevaireのアンソロジーには通し頁番号がなく，収録された作品のページ番号は原書のものである。
- Taylor, Bayard. *A Visit to India, China, and Japan in the Year 1953*. New York: G.P. Putnam, 1855.
- Thompson, Carl. *Travel Writing*. Routledge, 2011.
- Williams, Samuel Wells. *A Journal of the Perry Expedition to Japan (1853-1854)*. 1910. Beillevaire 編 *Ryukyu Studies since 1854: Western Encounter Part 2* 収録。本稿で記した頁番号は，ウィリアムズの随行記の初出となった *Transactions of the Asiatic Society of Japan*, Vol. XXXVII: Part IIの頁番号である。本随行記の邦訳は，洞富雄『ペリー日本遠征随行記』雄松堂出版，1970年。
- 大城立裕「『琉英国語』について」『沖縄史料編集所紀要(2)』，1977年，pp. 1-29.
- 高良倉吉『おきなわ歴史物語』ひるぎ社，1984年。
- 山里勝己「弱さと正義，力と不正義——琉球・沖縄，日本，アメリカをめぐる〈幻想〉試論」野田研一編『〈日本幻想〉表象と反表象の比較文化論』ミネルヴァ書房，2015年，pp. 187-216.
- ラブ・オーシュリ・上原正稔編，照屋善彦監修，上原正稔訳『青い目が見た「大琉球」』(*Great Lewchew [sic] Discovered: 19th Century Ryukyu in Western Art and Illustration*) ニライ社，1987年。
- (ウェブカンファレンス，2020年7月)において発表した原稿に加筆したものである。

* 本研究は科学研究補助金（「交錯するまなざし——琉球・沖縄をめぐる欧米のトラベルライティングの総合的研究」基盤研究（B）課題番号24320056 研究代表者山里勝己）の助成を受けたものであり，第93回日本英文学会理事会特別シンポジウム「交錯する眼差し——東アジア島嶼地域をめぐるトラベルライティング」

